
デカ物語(未来)

田沢舞矛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デカ物語（未来）

【Nコード】

N0546Y

【作者名】

田沢舞矛

【あらすじ】

高木涉（警部補）と佐藤美和子（警部）のお話

設定は未来

娘の妙和みかすと幸せに生活中

話は変な方へ（>=Rは付かないよ！！絶対に

こんな未来書いてほしい！！とかあればヨロシクお願いしますm）

1 (前書き)

妄想頭で頑張ってますよ!!

「あれっ？ 涉くん今日早番だっけ??」

「ああはい!!!」

「あっそうか私と1日違いだもんね」

高木 涉 # 5年前同僚 & 先輩の佐藤美和子とゴールイン

今は美和子、美和子の母、そして・・・

「パパ行くの??」

「うん。昨日のママと同じ時間に帰って来るからね」

娘の妙和みかずと生活中

「パパ嘘じゃない?」

「事件が早く解決したらね」

妙和は嬉しそうだ

「あゝ涉くん、今日帰って来るとき私の机にある事件ファイル持ってきて」

「・・・僕、昨日帰って来るとき美和子さんの机の上に確か10冊ほど分厚いファイルが置いてあるのを見ましたよ」

「あー松崎家の殺人事件のやつ持ってきて」

その舌をだす行為禁止にしてください
僕、キョン死しちゃいます

「わかりました。松崎家ですね」

「どうも**高木警部補」

高木警部補　それが僕の階級

えっ？美和子さんと同じ階級だって？

美和子さんは警部に上がったよ・・・僕に追い抜ける日が来るのか
な・・・

僕が警部補に上がったと報告するより先に美和子さんが走ってきて

「渋くーん警部に昇級したよー」
だもんね

「あっ・・・時間だいつてきます」

『いつてらっしやい』

・・・いつの間にかお義母さんまで・・・

「いつてきます」

「たっかぎーオッス!!」

「ゆっ由美さん!」

「玄関に探偵団、来てたわよ」

探偵団・・・コナンくん達が

今日は約束もないし・・・

「今日は約束なかったよな・・・て顔してる・・・」

「はい。今日は何にもないですし・・・事情聴取は明日ですし」

「届け物らしいわよ」

はっ!? 前の事件の渡し忘れ? いや、ただ犯人が首を吊ってただけだし・・・

だけって・・・警察失格だよ・・・いや

『高木刑事』

探偵団の皆が走ってきた

「さつきね佐藤刑事に会ったんだあ!! で私達今から社会科見学があるから渡しに来たの」

「ありがとう。社会科見学の方は大丈夫なの?」

「・・・大丈夫よ、小林先生・・・いや白鳥先生っていった方がいいのかしら・・・捜査一課なら良いって言ったから。条件付きでね、あっ今は捜査二課にいるわよ」

相変わらず6年になってもクールだなあ哀ちゃんは

「条件って?」

「白鳥刑事に弁当届けるんだよ」

「白鳥さん?」

「でも今いないみたいだね」

ああだから今日白鳥さん調子がわるかったんだ...

「今白鳥さんなら4丁目の事件に行ってるよ、メモと一緒に置いておっつか」

「うん」

それからいろいろとあったが何とか早めに切り上げる事ができた

「・・・松崎家の殺人事件のファイルは・・・」

「あれ？高木さん - - 何やってるんスカ？
いくら夫婦だからって机をいじっちゃあ / /」

「千葉」 松崎家のファイル知らないか？探しても見当たらないんだよな」

「もしかしたら机の中とか・・・昨日佐藤さん机の中に青いファイル入れてましたよ」

流石千葉、よく見てる

「何番目？」

「確か一番大きい引き出しに - - - - -」

「あつあつたあつた / / あ」

「高木さんどうかしました？」

「今日何日？」

「7月25日ですけど」

そこには黄緑色の袋に入った小さな時計があった
そして《Wateru》と彫られていた

「高木さん良かったですね・・・」

「ああ んじゃ帰るとするか」

「直ぐに調子にのるお父さんって子供が苦労しますよ」

「娘の前では立派な父親でいたいよ・・・」

「おや高木くん」

「白鳥さん」

「これ僕の机の上に置いてありましたよ」

「ああ @&」

「それって妙和ちゃんが生まれるちょっと前の写真だよな」

「はあ／＼でも僕のはちゃんと定期入れに入っていますけど」

「佐藤さんのは?」

「ああそうか」

「高木くん!」

「日暮警部!」

なんで帰るごとするごそごそるごるご...

「君にお届けものだ」

「パパ」

「妙和！？何で??」

「もー妙和つたら出るの早すぎよー」

「美和子さん!?!」

へっ!?!なんで二人が

「いやあ涉くん帰って来るの遅いし私ももう張り込みの時間だから連れてきて涉くんに預けようかと」

「もし僕がいなかったらどうしてたんですか?」

「涉くんの机の上にメモ残して由美のアパートに連れていこうかと」

はあその手があったか

「でもお義母さんは?」

「あー突然友人の法事に」

「パパ肩車して」

美和子さんと同じ顔で訴えられると弱いんだよな僕

「やった〜」

「あつ時間だ！！目暮警部！！1丁目の張り込みいってきます」

「ああ頼んだぞ」

「了解！！んじゃ妙和おやすみ」

「ママいってらっしゃい」

「いってきますー！！あつ涉くんお誕生日おめでとー！！！！」

「ありがとうございます。あつ気を付けて」

流石元陸上部エース

速い

「妙和ちゃん将来の夢は？」

「パパとママみたいな捜査一課の刑事さん」

「そーか頑張つてね」

「ママにできたんだから私にもできるもん」

白鳥さんすごい顔してる

「まあ妙和、前の不審捕まえたもんな」

「うん！！踵落としと関節固め」

「妙和ちゃん何歳？」

おーあれ以来初めて警部が口を開いた

「4歳」

「後20年か」

「？」

「高木ー早く帰ったらどうだ」

「あっはい」

「妙和ちゃんの腹の虫泣いているぞ」

「帰りにコンビニでも寄ったらどうだ」

「前のセブンスイレブンおにぎり半額セールやってるぞ」

「あっありがとうございます、お先に失礼します！妙和行こっか」

「うん」

「明日は佐藤さんと交代の時間だからな。遅刻したぶんだけ佐藤くんに迷惑がかかるぞ」

「了解しました」

3 (後書き)

何とかギリギリ・・・
キスシーン出したい(;´・`)

4 (前書き)

感想有難うござります

作者の性格はバカなので許してね

「ねえねえパパ？ママってスゴいの？」

どきっ

まさかとは思うが・・・

「何でそう思うの？」

「パパより偉そうだから」

やっぱりそうきた・・・

「確かにママは偉いよ。でもさっき一緒にきた目暮警部わかる？あの人よりはまだ下だよ」

「・・・パパよりは偉いよね？」

「んー・・・まあね」

「決めた！！！妙和絶対パパより強い正義の味方になる！！でね、事件がない世界にするんだ！！」

まだまだ可愛い夢だなあ

「妙和？正義って言葉は心の中で唱えるモノなんだよ？言葉にだしたら正義じゃないんだ」

「？」

あー美和子さんも分からないときこんな顔するよなあ

「……後でママにおにぎり持って行こっか」

「うん……!」

「……あつ 涉くん有難う」

「……やっぱり白鳥さんですか」

「やっぱりって……」

「おにぎりの差し入れです」

「有難う涉くん 昆布あるかなー」

「……白鳥さんは?」

「僕は澄子さんにサンドイッチ作って貰ってますから」

「愛妻弁当ですか……」

「いただきますーす」

「あっお茶とジュース後ろに置いておきますね」

「了解」

「じゃあ明日の交代の時間にまたきます」

「OK!!!高木渉警部補」

「・・・美和子さん楽しまないで下さい」

「つい楽しくて、あっお母さん明日の朝に帰ってくるから」

「わかりました報告有難うございます」

5 (前書き)

げき短文・・・

理江が担当致しました

・・・悔しいけど舞矛のほづが才能あるかも

朝7:20

「渉さん時間は・・・」

「・・・へっ?」

あれっ?お義母さん?

「もう起きないと遅刻しますよ」

「えええ!!!すみませんワザワザ・・・」

「渉さん美和子と交代ですか?」

「はい」

「これ郵便局で・・・て渡して置いて下さい」

「あっはいわかりました」

「渉さんが・・・て考えてちゃあダメよ昼の12時までには郵便局だから」

「わかりました」

「美和子さん白鳥さん交代です」

「あらもうそんな時間？」

「・・・高木くん一人で？」

「いえ後で千葉がきます」

「ほう」

「あつ美和子さんこれを・・・お義母さんが直ぐに郵便局にと・・・」

「へえわかったわ。妙和は？」

「多分まだ寝てると・・・僕が出発したときまだ寝てましたし」

「わかったわ。有難うね」

「いえ・・・」

「千葉くんが来たようだ」

「白鳥さん、これ美和子さんと食べて下さい」

「有難う」

6 (前書き)

高佐好きさんへ

グダグダな文でお許しください(汗)

今回は千葉が登場します

コナンの雰囲気だせてなくてすみません

「後はお願いしますね」

「わかりました！…白鳥警部どの！…」

「・・・高木くん〃〃」

「犯人の動きはなしでいいんですよ」

「・・・動いていたら私達ここにはいないわよ」

「あっはははは・・・そうっすね〜(汗)」

「後は頼んだわよ」

「はい！！二人ともゆっくり休んで下さい！！！！！！」

「高木さん！！！！遅れました／＼／」

「見たらわかる」

時刻は10時43分

二時間の遅刻

「・・・どうしてこんなに遅れたんだ・・・」

「あー僕低血圧で・・・」

僕だって低血圧だよ・・・

「もしかしての佐藤さん達との交代では？」

「そうだけど・・・なぜ？」

「いやあ高木さんの頭がぐしゃぐしゃですから」

・・・なぜそれだけでわかる

「高木さんが髪の毛をぐしゃぐしゃにして張り込みに来たときは大抵佐藤さんがからんですからね／＼まあ彼女に簡単にいえば残業？させたくないんですよね」

「その天才な頭、事件のトキに使い」

「わかりましたあ（汗）」

そのまま時間は過ぎ、交代の時間になった

「お疲れ様でした」

「後は宜しく願いますね」

「了解しました。高木警部補」

「ただいま」

僕はいつもより早めに帰れることになった

「パパお帰り」

「妙和ただいま」

「あのね、ママがねおばあちゃんとケンカしてるの
ケンケンカですとー

「たっただいまですー！ー！ー！」

「あら涉くん（さん）早いよね」

「あれっ？ケンカは？」

「ケンカなんかしてないわよ」

「妙和がなんか」

「ああこれよこれ」

・・・煮物？

「いやあ私は薄味の方が好きなんだけどお母さんが
「渉さんは絶対に濃い口派だ」とか言ってる」

渉くん、薄味派よねー

「僕どっちも派なのでどちらでも大丈夫ですよ」

ほっとしたような落ち着いたため息が聞こえる

これでケンカ、なくなるのかなー

8 (前書き)

検問終了}

・・・普通検問はだいたい交通課なのに何故捜査一課なのだ!!
それは殺人事件の捜査だからだ!!

その日の食卓には美和子さんが作ってくれた料理が並んだ

「・・・薄口か濃い口か・・・」

「渉さんならどちらを選びますか？」

「・・・ええっと・・・僕はどちらかと言われても・・・」

「渉くん・・・早く言いなさい」

そんなに攻めないで・・・

「みつ妙和は？」

「薄口と濃い口って何？」

・・・そうか・・・まだ分かりませんか・・・

「僕は薄口派ですかね・・・」

「わかったわ」

・・・これで良かったんですね

次の日・・・今日は家族みんなでお墓参りに行くことになっていた

美和子さんのお父さん、
佐藤正義さんのお墓に…

「ママ、この大きい石何？」

「墓石よ、この中におじいちゃんがいるのよ」

「おじいちゃん？」

あー涉くんのお父さんは優^{ゆう}さんで本人の希望から優^{ゆう}ちゃんとあだ名
呼びしてるからおじいちゃんがわからないのか…

「ママのパパよ・・・」

「へえ・・・警視庁の刑事さん？」

「！！！！！！！！」

何故知ってるの？

私は一回も言っていないわよ

「お母さん言ったの？」

「言っていないわよ」

「涉くんは？」

「いえ・・・僕は正義さんのこと全然知りませんし」

それはそれでどうかと・・・

「妙和、なんで分かったの？」

「だってママとパパ刑事さんでしょ？だから」

「・・・安易ね・・・」

「？」

8 (後書き)

理江が担当しました。

墓ネタ、最近墓参りが多かったこともあり書きたかったんですけどねー

つぎはもっと分かりやすく書くぞ!!!) 決心

9 (前書き)

今日は手持ちぶさたの為出来る限り更新したいなあと思っています

* *

もっ勿論、手は抜かないですよ!!)。 。 ; ; (

お父さんー…

私はもう33歳になってしまいました

妙和は4歳です

涉くんが我が家に来てから5年が経ちました

そしてお父さんが我が家を去ってから27年です…

あの頃の私は人を好きになるのが怖かったです。でも、いまは違います

人を好きになり、愛する

それが私の使命です

お父さんー…今まで見守ってくれていてありがとうございます

そして松田くん

相変わらず萩原さんと吊るんでいるのかなあ

これからも私達のことを見守っていて下さいね

(涉)

正義さん、お義母さんと結婚し美和子さんを貴方の娘さんにしてく
れてありがとうございます

貴方のおかげで今、二人とも幸せです

9 (後書き)

まだ続きます

10 (前書き)

救急箱って私なんか好きなんだよね

まあ怪我をするのは私じゃなくて私が技かけて受け身を失敗した舞
矛だけどね

常に救急箱は包帯で一杯(笑)

あれから14年がたった

「今日からここ捜査一課強行犯捜査一課に配属されてきました高木妙和です！皆さん知っているとありますがよろしくお願いします」

高木と佐藤の子供の妙和が捜査一課に配属が決まった

「担当は・・・中原淳沙くんよろしく」

「了解しました」

「中原くんよろしくお願いします」

「こっつこちらこそヨロシク」

今中原くんが舌を噛んだ理由

勿論妙和が佐藤そっくりで可愛く美人だったから

それ以外に理由はない

「高木渉！！取り調べ終わりました！！」

「ああ高木くん早いね・・・」

「・・・白鳥さんもう少し取り調べが早く終わったことを喜んでくださいよ」

「佐藤美和子！！犯人確保しました！！ただいまより取り調べを
行いたします！！・・・あら・・・妙和！？」

「今日より捜査一課強行犯第3係りに配属になりました！！ヨロ
シクお願いします」

「・・・佐藤さん、取り調べ、拝見させて頂いてよろしいでしょ
うか」

「あら中原くん・・・どうして？」

「今後の高木さんに佐藤さんみたいな取り調べの仕方を仕込んでお
きたくて」

「まあいいわ・・・涉くん取り調べするから同行しなさい」救急
箱持ってきてね」

「「きゅっ救急箱！？」」

どうして取り調べに救急箱があるのかわからない二人だった

10 (後書き)

はっ話飛びすぎたああ!!

救急箱は直ぐに使われることになった

「俺は無実だあああ！！」

そう叫んだ犯人が逃亡をはかりー・

「あつ……」

「ウラアアアア！！！」

きれいな佐藤さんの背負い投げがきまり、犯人は取り押さえられた

「バカねえ……痛い目に会いたくなかったら逃げようなんて考え
なかつたら良かったのに」

「……」

その後取り調べは無事行われた

「バツカッタレ！！！」

バツカッタレ？バカッタレじゃなくて？

「相手が別れ話を仕掛けてきた、だから殺した……言い訳になっ
てないじゃないの」

「あんたには言われたくないぜ。どうせあんたは人生上手く……」

バシッ！！！！

「貴方は命の重さがわかってない！！私ならもし涉くんが別れ話を仕掛けてきても、好きだった彼氏を殺したりしない・・・大切な人には幸せになって欲しいから・・・私ならその人と居た時間を大切にする」

「それはあなたの考えだ」

美和子さん・・・

「確かにそうよ・・・でも私は涉くんが別れ話を仕掛けてきても、・・・離婚したと言ってきてももう一度話し合う・・・直ぐに殺したりはしないわ」

「・・・俺は相当な大バカ者だったみたいだな・・・」

こうして事件は終止符を切った

「妙和、中原くんごめんね／＼取り調べらしく無くて」

「いえ／＼でもかつこ良かったですよ。佐藤先輩」

「・・・お父さんって愛されてるわね・・・」

「^^ ^^・・・」

11 (後書き)

雑デスク・・・

雑すぎる・・・しめんなさい

取り調べは思っていたよりも長かったらしく取調室をでたら既に日が暮れていた

「妙和は今日何時上がり？」

「ええっと・・・確か8時上がりだったと・・・お母さん明日非番だよー」

「ええ。あっそうだと郵便局でハガキ30枚お願いできる？」

「いいけど何で？」

「クラス会だつて」

「・・・お母さん参加できるの？」

「無理だからハガキを担当したのよ」

「行ったら？」

何を言っているんだろうこの子は

「だって20年近く行ってないんでしょ？」

「その日は日直よ。行けるはずないじゃない」

「いいじゃん」

「……」

「美和子さんーん犯人の連行をしますので一緒に…」

「あっうん!!あっそうだ妙和!!聞き込みとかの時は「佐藤さん」
って言うてね」

「……なんで」

「同じ課にいるなんて何か恥ずかしいもの」

「あっそう」

「美和子さん!!????????」

「あっうん今いく〜じゃあ妙和、ハガキヨロシクね」

「ハイハイ」

12 (後書き)

私も同窓会企画係だったなあ・・

参加ができないためハガキを送ってます

何故か

特に意味はない

でもお詫びの気持ちを込めて人数分のハガキをもう一人の担当に送る

私は今東京にいるんですけど実際のふるさと？は大阪です

最近ずっと美和子さんの熱が続いている

「今日病院行ってくるわ…流石に2週間続いているし…」

「あーお母さん私もついていく」

「あなた仕事は？」

「今日非番」

「おめでとつございます
2カ月です」

「ほえ？」

「本当ですか!？」

妙和はいつもよりハイテンションだ

「今何て？」

「・・・おめでと〜ございます。・・・年の離れた兄弟ができたんですよ...」

「ええ!？」

「涉くんお帰りなさい」

「ただいま...どうだった？病院での診断」

「あっお父さんおかえり〜」

「妙とお風呂沸いてるわよ」

「わかった〜」

.....

「2カ月だった」

「・・・へっ？」

「妊娠してた」

「えっ……」

「今が11月だから……7月に生まれるよ……」

「本当ですか!?!」

「なっ何涉くん泣いてるのよ!?!」

「嬉しいんです」

「……私も……」

「妙和と違って次は夏ですね……」

「そうね」

「大丈夫です!美和子さんは僕が守ります」

「ありがとう」

13 (後書き)

たっ高木!!美和ちゃん絶対守れよ!!守らなかつたらお姉ちゃんが許さないからね

高佐好きさんからのリクエストでした
でも続編

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0546y/>

デカ物語(未来)

2011年11月7日08時07分発行